

ポケモン

第9期 OB 竹内 亮介

2013年度より、わたくし竹内亮介は、大学院生としての日々を歩み始めました。進学を決意した最大の動機は、呆れるほどにシンプルですが、「研究がとても好きだから」でした。良く言えば純粋な、悪く言えば浅はかな動機だけを信じて、この1年間を過ごしてきましたが、「〇〇がとても好き」という動機には、どうも得体の知れないエネルギーが満ちている気がしてなりません。自分が心から好きだと感じるものに取り組んでいるとき、誰に言われる訳でもなく、人間は、「もっと上手くできないかな」、あるいは「もっとより良いものにできないかな」という発想に至ることが多いかと思います。すると、それを達成するために、分析・反省・工夫を行うようになります。勿論これも、誰に言われる訳でもなく。

既存研究の見解に対する解釈は妥当であるか。それを踏まえて立てた問いに鋭さはあるのか。その問いへの1つの回答としての仮説に論理的な隙はないか。仮説をテストする方法は厳密であるか。文章の表現や構成は適切であるか…などなど。他にも挙げれば枚挙に遑がありませんが、こんな具合に、出逢う論文を隅々まで分析するようになりました。そして、その論文にはあって自分の論文にはないものを反省し、その差を埋められるように工夫する。当然のことながら、その過程において、面倒くさいことも山ほどありますが、何といても原動力は「とても好きだから」なので、その“面倒くささ”すら楽しい、という無敵状態へと突入していきます。我ながら、この感覚、なかなか良い感じなのではないでしょうか？

そういえば、この感覚は、小学校低学年の頃、「ポケットモンスター ピカチュウ版」に熱を上げていたとき（いかにして、ふたごじまでマスターボールを使わずにフリーザーをゲットするかや、いかにして、近所の西村君に通信対戦で勝利を収めるかに、苦心していたとき）の感覚と非常に類似しています。当時も、「ポケモンがとても好きだから」という動機のおかげで、得体の知れないエネルギーを感じながら日々を過ごしていました。あれから約15年の歳月が流れ、情熱を燃やす対象も周囲の環境も大きく変わりましたが、(誤解を招くことを恐れずに言うならば) 研究もポケモンも、僕にとっては本質的に同じです。いつもいつでも上手くいくなんて保証はどこにもありませんが、ああ、憧れのポケモンマスター改め研究者になりたいな、ならなくちゃ、絶対なってる、という気持ちで今後も邁進してまいります。



当時、著者の1番のお気に入りのポケモンであったラプラス